第９課　サタンの終末時代の惑わし

【暗唱聖句】

「この巨大な竜、年を経た蛇、悪魔とかサタンとか呼ばれるもの、全人類を惑わす者は、投げ落とされた。地上に投げ落とされたのである。その使いたちも、もろともに投げ落とされた」黙示録12:9

【今週のテーマ】

今週はサタンの惑わしに対してどのように対処したら良いのかを考えます。

【日曜日・最大の惑わし】

サタンが存在するのかということは、神が存在するのかというのと同じくらい重要な問いです。クリスチャンでもサタンの存在を信じてない、あるいは真剣に考えていない人々が少なくありません。

「わたしは、あなたの住んでいる所を知っている。そこにはサタンの王座がある…」黙示録2:13

「ティアティラの人たちの中にいて、この女の教えを受け入れず、サタンのいわゆる奥深い秘密を知らないあなたがたに言う…」黙示録2:24

聖書を見れば、サタンは空想上の存在でもなければ、世の苦しみを説明するための非科学的な表現でもなく、実際に存在していることがわかります。しかし、そのことを聖書の時代の人々の中にも知らない人たちが少なくなかったようです。しかし、このサタンは現実であり、そしていまどこにいるのかというと地上なのです。

「この巨大な竜、年を経た蛇、悪魔とかサタンとか呼ばれるもの、全人類を惑わす者は、投げ落とされた。地上に投げ落とされたのである。その使いたちも、もろともに投げ落とされた」黙示録12:9

サタンの惑わしの中でも最大のものは、サタンなど存在しないと思わせることでしょう。しかし、敵を無視して善と悪との宇宙規模の大争闘に勝利することはできません。サタンの話を聞くと怖くなるから聞きたくないという声も時々聞かれますが、わたしたちはこの霊的現実にもっと真剣に目を向けるなら、霊的眠りに陥ることもなくなるのではないでしょうか。

【月曜日・2つの重大な誤り】

「だが、驚くには当たりません。サタンでさえ光の天使を装うのです。だから、サタンに仕える者たちが、義に仕える者を装うことなど、大したことではありません」第二コリント11:14、15

サタンは光の天使を装って近づいてきます。それを見分ける方法は聖書のみ言葉に照らし合わせて正しいかどうかを判断する以外にありません。大部分が似ていても、どこか重要な点が必ず聖書の教えとは異なるはずです。

「不法の者は、サタンの働きによって現れ、あらゆる偽りの奇跡としるしと不思議な業とを行い、そして、あらゆる不義を用いて、滅びていく人々を欺くのです」第二テサロニケ2:9、10

サタンは奇跡を行うことができます。だから、奇跡を信じる理由にしてはなりません。サタンの最後は黙示録20:10にあるように、「彼らを惑わした悪魔は、火と硫黄の池に投げ込まれた。そこにはあの獣と偽預言者がいる。そして、この者どもは昼も夜も世々限りなく責めさいなまれる」と地獄の火で焼かれて滅びていくことが決定しています。しかし、そのときまで一人でも多くの人々を惑わし、道連れにしようとしているのです。

また、サタンの惑わしの中で、終末時代の大きなポイントとなっていくと考えられているのが、「霊魂不滅と日曜日の神聖化」です。エバを騙した「いつまでも死ぬことがない」というサタンの欺瞞は、今も続いているのです。また日曜日に安息日が変わったという嘘によって、サタンは人間に創造の記念日を忘れさせ、創造主から目を背けさせるのに成功しています。この2つの重大なサタンの欺瞞を私たちはきちんと見分け、真実な教えのもとに生きることが求められています。

【火曜日・霊魂の不滅】

サタンの重大な2つの欺瞞の一つ、霊魂不滅について考えてみましょう。現代人の大部分の人が、宗教を問わずこの霊魂不滅を信じているようです。臨死体験などがまるで霊魂不滅の科学的根拠であるかのように語られることもあります。臨死体験がどのような体験であろうと、人間は死んだ後に霊魂だけが生き続けるようなことはないのです。肉と霊は分離できず、それらが一つとなって初めて人間として存在しうるからです。また、オカルトや心霊術などによっても容易に人々は惑わされ霊魂は不滅であるように騙されています。聖書がうかつに心霊術と関わってはならないと教えているのは、サタンがそこに介在し、人間を間違った方向へ引っ張っていくことを知っているからです。では、聖書で死後の状態について何と教えているのか見てみましょう。

「…しかし、死者はもう何ひとつ知らない…」コヘレト9:5

「何によらず手をつけたことは熱心にするがよい。いつかは行かなければならないあの陰府には、仕事も企ても、知恵も知識も、もうないのだ」コヘレト9:10

コヘレトには、明確に死者は何も知らないし、何もできないと言っています。

詩編115:17 主を賛美するのは死者ではない。沈黙の国へ去った人々ではない。

死者は神様を賛美することさえしなくなります。

「霊が人間を去れば人間は自分の属する土に帰り、その日、彼の思いも滅びる」詩編146:4

人間が死ぬと霊は元の神様のところに戻ります。すると、残された肉体は土に帰ります。その瞬間、思いも滅びる、つまり何もわからなくなるのです。

「多くの者が地の塵の中の眠りから目覚める。ある者は永遠の生命に入り、ある者は永久に続く恥と憎悪の的となる」ダニエル12:2

しかし、人間が死ぬと存在そのものが消滅するわけではありません。人間の理解を超えた方法で、神様を信じる者たちは目覚めるのです。

【水曜日：安息日と進化論】

サタンのもう一つの重大な欺瞞である安息日について考えてみましょう。サタンは見事なまでに安息日を日曜日に変更させることに成功してきました。現代においてサタンは進化論を用いて、より一層安息日を曖昧にさせています。安息日は神様の創造のみ業を記念するための日です。神様は6日間ですべてのものを創造し、7日目に休まれたのです。しかし、クリスチャンの中には進化論的思想と創造論を融合させようと試みようとする人たちが少なくありません。7日間ではなく、もっと長い年月をかけて神様が生物の進化という過程を通して創造してきたと考えます。その瞬間、第七日目の安息日は意味を持たなくなるわけです。

【木曜日：偽の三位一体】

「わたしはまた、一匹の獣が海の中から上って来るのを見た」黙示録13:1

黙示録は竜と海の獣、陸の獣からなる三位一体を明らかにしています。その中で父的な存在となるのが竜です。竜はサタンのことであり主導権を握っています。そして海の獣であるローマ法王に力と王座と権威を与えますと、やがて獣は偽キリストのような振る舞いをするようになっていきます。

「この獣の頭の一つが傷つけられて、死んだと思われたが、この致命的な傷も治ってしまった。そこで、全地は驚いてこの獣に服従した」黙示録13:3

獣はキリストが死んで復活したように、死ぬような傷を受けたがその傷も治って全地を驚かせます。これはフランス革命によって宗教が否定されローマ法王は幽閉され死んでしまったにもかかわらず、再びカトリックとローマ法王の権力が復活した現代を表しています。またキリストが3年半の活動したように、獣には42か月の間権力をふるうことが赦されます。これはローマ法王権が確立した538年からフランス革命で法王が途切れる1798年までの1260年間を表しています。（42か月は3年半、1260日のことであり、1日が1年という預言の法則から1260年となる）

「わたしはまた、もう一匹の獣が地中から上って来るのを見た」黙示録13:11

地中から上がってきた獣はアメリカを表しています。陸の獣アメリカは海の獣のローマ法王権に対して関心を促すようになります。そのためには天から火さえ降らせると書かれてあります。これは核兵器のことを表しているのかもしれません。世界は急速に最終時代に向かい動いています。世界を統一する働きは現実に行われており、宗教、政治、経済、軍事などの力を借りて進んでいくことになるでしょう。その中で中心にいるのは竜であるサタンなのです。